

# 心的外傷からの回復とスピリチュアリティ

—アリス・シーボルドの作品『ラブリー・ボーン』の成立過程をとおして—

古澤 有峰

## 1. はじめに—アメリカにおける心的外傷論争について

本稿において筆者は、はじめに心的外傷をめぐる、特にアメリカにおける議論の流れを示す、2つの大きな代表という位置付けで、ジュディス・L・ハーマンの『心的外傷と回復』<sup>(1)</sup>と、アラン・ヤングの『PTSDの医療人類学』<sup>(2)</sup>を簡潔に紹介する。続いて、この錯綜した問題への一つの解決の可能性を示すものとして、アリス・シーボルドの作品『ラブリー・ボーン』を紹介し、その成立過程と作品の分析を通して、重大な心理的・身体的傷害を負いつつ生き残った生存者が、いかにして新しく生きる道を探し求めて行くのか、またその過程においてスピリチュアル<sup>(3)</sup>な領域が、特に当事者<sup>(4)</sup>に対してどのように立ち現れて来るのかについて、考察を加えたい。

まず、心的外傷とは何であろうか。トラウマ研究に関するバイブルと呼ばれている本、『心的外傷と回復』の序文の中で、著者であるジュディス・L・ハーマンは、「心的外傷とは権力を持たない者が苦しむものである。外傷を受ける時点においては、被害者は圧倒的な外力によって無力化、孤立無援化されている。外力が自然の力である時、これは災害である。外力が自分以外の人間の力である時、これを残虐行為という。通常のケア・システムは、自分は自分をコントロールでき、人とつながりを持って、自分がいることには意味があるという感覚を人々に与えるものであるが、外傷的な事件はこのケア・システムでは及ばない力を持っている」と述べている。<sup>(5)</sup>

心的外傷とは稀有なものではない。ハーマンは続けて、外傷的な体験や事件が、いわゆる正常の範囲を越えている、または逸脱しているといわれるのは、それが稀なものであるからではなく、むしろその人の人生の日常であったもの、または通常の行為パターンであったものを、無惨に打ち壊してしまう為であると述べている。そしてその破壊的状况は、その人の人間関係と日常生活に大きな打撃を与える。つまり、そのような外傷的な体験によって、人間の体験に意味や秩序を与えている信念のシステムは形骸化され、また無惨な迄に引き裂かれてしまう。そしてそれは、被害者の自然的そして超自然的秩序への信仰を踏みにじり、被害者を生か死かという二者択一の危機的状况の中に投げ入れるからである。彼女の著書は、そのような体験を持ちながらも、それを社会によって認められず、また黙殺される事によってそれを言語化する機会も失われ、その事によって二重三重の被害を受ける立場にあった人達、またその人達をサポートする立場の専門家達によって熱狂的な支持を受けた。

しかし彼女は出版当時から、自身の著書が賛否両論を巻き起こすであろうとの予測を行っていた。その理由はまず第1にそれがフェミニストの視点から書かれたものであるという事、第2にその概念が既成の診察概念に挑戦するものだという事、そして第3にそこに記されている内容が、身の毛のよだつ程の恐ろしい事柄であるから、というものであった。人は本当に恐ろしい事については、実は誰も耳にしたくないし、出来るだけ早く忘れたいのである。更にこの論争は、ハー

マン自身が言及しているように、初めから政治的な様相を含まずにはおれないテーマでもあった。そのことが拍車をかけたかのように、心的外傷研究者達はその後、猛烈な攻撃に曝される事となる。(6)

このハーマンの心的外傷をめぐる研究について多く行われる批判は、現在の訴訟社会化したアメリカの反映でもある。例えば、老齢期に入らんとする女性が、既に死に瀕しているような父親に向かって、幼児期の虐待に付いての告発を行う等の訴訟事件が、主に 90 年代に入ってからアメリカで頻繁に行われるようになった。主にカウンセリングを受ける事によって浮かび上がる記憶を元になされるが多かった為、「記憶戦争」とまで呼ばれる事になったこの傾向は、アメリカ社会に深刻な問題を提起する事となった。こうしてバイブルと呼ばれるハーマンの本を、実は虚構に満ちたものであり、それが如何に精神科医やカウンセラーを中心とした、一種の流行化された動きの中で行われたものであったのかを告発する批判が相次いで現れた。(7)

この論争に関連して、アメリカの医療人類学者アラン・ヤングは「PTSD が歴史の産物であって臨床家と研究者がその前提条件（実地医療と技術）を創り出すまでは存在しなかった臨床現象であり、この条件の中から出現したものである」という論陣を張った。PTSD (Post-traumatic stress disorder) は心的外傷後ストレス障害と訳され、大災害や戦争などの異常体験をした後に起こるストレス障害の事を一般に指す。PTSD 研究は元々、アメリカのベトナム戦争で大変なトラウマ (trauma: ギリシャ語、精神的な傷) を経験した人たちが、帰国後に社会不適応を起こし、様々な問題行動や精神症状を示した事について、その分析や治療法を確立する為に行われた。現在は、私達の日常に起こりうる様々な出来事 (例: 交通事故、レイプ、幼児期の虐待等) から生じると考えられているが、その診断や認定にあたっては様々な問題も指摘されている。その一方で、生理学的な研究が進められる傾向が出て来ている。

上述の発言を懐疑派的立場から発せられたものと『ニューヨーク・タイムズ』に指摘されたヤングは、その批判的立場に基づきながらも、PTSD に対する態度を白か黒かにして、「外傷」が存在すると確信する者と、その可能性は一切ないとする者に二分しようとするのは間違っているとしている。その上でヤングは「現在の私達の知る PTSD 概念は、記憶、自意識、心理学的思考重視、そして自己開示の有効性についての (西方世界の) 文化的前提条件に根ざす概念である」(8) とし、PTSD が世界的な規模で注目を浴びている状況について、PTSD のグローバリゼーションであるとしている。そして PTSD とは時代を超えた単一の障害実体というよりは、歴史の所産なのではないかと疑問を提起する。ヤングの研究はこのように、記述人類学的であると共に歴史学的でもあるところに特徴がある。

このような一連の批判やそこから生じた論争が与えた肯定的な影響とは、トラウマや心的外傷後ストレス障害 (PTSD) の概念の、際限なき乱用に対して警鐘を鳴らした事であったと言える。過った記憶の回復は、一種の洗脳行為にさえなりかねず、カウンセラーの思い込みがクライアントに押し付けられた場合の弊害について、この非難が露わにした事実は多くあったと考えられる。実際に、それを心的外傷と認識し、告発するという「文化」が形作られ、それが人々の認識に影響を与えた可能性を選り分けて行く為に、外傷被害者の生物学的研究が進んだ、という経緯もある。

しかしその一方で、このような騒動に巻き込まれる中で、実際に被害を受けた人達が不当に糾

弾される事態に至った事例はなかったであろうか、という疑問が湧いて来る。このような真に小さな声は、闘争的な応酬の中ではかき消される事が多いのもまた事実である。犠牲者を出さない為にはどうしたらよいか、という根本的な原因追求の議論は忘れ去られ、ただの犯人探しに貶められてしまう、そのような“パワーゲーム”的状況においては、実際に被害を受けた人達が、その議論の後ろに置いて行かれる事も多かったのではないだろうか。その人達の、その絶望的な声は、一体どこへと向かうのであろう。

ヤングのこの書の発行から約2年後、1997年にハーマンは、増補を加えた第2版を出版した。従来そのままの本文に加えて、最後に加えられた1章の題は「外傷の弁証法は続いている」であった。そこには、外傷被害者の生物学的研究の進展もあり、外傷自体は科学的に認知されたものの、新しい世代のそのような研究者達は、外傷を研究対象として見るようになり、被害者と連帯し、苦しみを分かち合う中で研究を行うというのが初期の研究者の原点であったにも関わらず、そこから遠く離れる事で、研究対象志願者が再度、心的外傷を受ける危険が増大している事を指摘している。

また現在のアメリカにおいて、被害者の訴えが不利に却下され、加害者側からの反撃が強まっているような現状を憂え、それを踏まえながらそれを以下のようにして伝えようとしている。ハーマンはここで「外傷の弁証法がふたたび演じられつつある。心的外傷の被害者に耳を傾けた者が戦いを挑まれるのは、歴史上これが初めてでない事を思い出そう。これが最後でもあるまい。このわずか2、3年間に、多くの臨床家が対処するすべを身に付けなければならなかった脅迫と嫌がらせの戦術こそ、長年にわたって、女性、児童およびそれ以外の被圧迫者の弁護に立った草の根の人達が耐え忍んで来たものと同じやりくちである。傍にいあわせた者の立場にある私達は、暴力の被害者たちが日々奮い起こしている勇気のかげらでも私達の中にあるのかなのか、自分の中を覗き込んで見るべきである」と述べている。<sup>(9)</sup>

以上のように、この数年間の心的外傷論をめぐる状況というものは賛否両論、渾沌としたものであった。ハーマンがかばった、被害を訴えた人達やそれを弁護する関係者達の全てが、100パーセント本当に被害者であったという保証は出来ないのと同様に、ハーマンを批判した側の人達、また加害者であると告発されながら無罪になった人達も、また同様に100パーセント無実であったという保証も出来ない、残念ながらおそらくそれが現実なのではないだろうか。そのような事実を理解した上で、一体私達は何をどう問うていけばよいのであろうか。

この問題をめぐる、この数年間のアメリカ社会における困惑は、ちょうどこのようなものであった。そしてそれによって被害を受けたまま放置されるのは、被害を受けた側であるにもかかわらず、それを真実とは認めてもらえない人達、また殺されてもの言えぬ立場となった人達、または殺されたかどうか（遺体が見つからない為）定かではない人達である。そのような人達、特にその多くは女性と子供達であったが、そういった被害を一方向的に受けた人達を目の当たりにした人々の思い、またはそのような被害の当事者やその家族となった人達の思いはこの数年間、アメリカ社会の中に、まるでどこまでもついてきては現れる亡霊のように漂っていた。本稿において次に紹介する本が、熱狂的な支持を伴って現れたのは、ちょうどそのような社会的時代的背景があったという事を、特に日本に住む私達はあらかじめ認識しておく必要がある。

## 2. アリス・シーボルドと『ラブリー・ボーン』という作品について

アリス・シーボルド (Alice Sebold) は、まさにそのような壮絶な心的外傷体験を持つ人物である。それについて述べる前に、まずは作家としての彼女の側面に触れなくてはならない。2002年の夏、アナ・キンドレンという人物が、全米ネットワークで放送されているテレビ番組で、まだ発売される前のある新人作家の小説を絶賛する、という異例の出来事があった。キンドレン自身、ピューリッツァー賞を受賞したこともある有名なコラムニストである。その彼女が発売前から絶賛した小説、それが本稿において分析・検討を行う、アリス・シーボルドによる初めての小説、『ラブリー・ボーン (The Lovely Bones)』<sup>(10)</sup>である。

これが今に続く彼女の作品への、多くの人達からの熱狂的な支持の始まりであった。この本は刊行からわずか2ヶ月で全米1位はおろかミリオンセラーとなり、また「2002年にアメリカ人に最も読まれた本」という榮譽を受けた。これだけの反響をアメリカ社会に与えたこの本が、レイプ殺人から始まる物語であるという事をどのように捉えるかは、その読み手によって全く異なるであろう。アメリカと日本の、この問題をめぐる土壌や歴史的背景の違い、といったものも考慮しなくてはならない。

しかしながら、特にこの数年、犯罪被害者とその家族に対するケアの問題は、日本社会にとっての大きな課題ともなっている。<sup>(11)</sup>そこで被害を受けた、また肉親を亡くした家族の悲しみは、まさにスピリチュアル・ペインのそれであると言えるであろう。「何故、私が？」また「何故、私の家族が？」という問いは永遠に繰り返される。しかし失われた命や、それ以前の平穏だった日々は、以前のような形では戻る事はないのである。

この問題について、アメリカは良くも悪くも“先進国”である。犯罪被害者とその家族についてのケア、またそのようなシステム体制が進んでいる反面、行方不明の為に捜索願を出されている子供達や女性達は数多く、かれらの多くは犯罪、中でも特に性犯罪の被害に遭った可能性が高いと考えられている。かれらを探す家族達によって掲載される写真が、毎日の食卓にのるミルクのパッケージの背中に印刷されているのを時折見る事が出来る。そこには自転車のヘルメットをかぶったり、歯にまだ矯正用のプレスが見えたりする、幼い男の子や女の子の笑顔が溢れている。それが現代アメリカ社会の日常風景の一コマである。

このような事実が、これほどまでに『ラブリー・ボーン』が読まれた背景にある理由の一つである。しかし皮肉な表現をするならば、前述のような心的外傷をめぐり議論に代表される話題、またそのような題材の小説にさえ目が肥えているといえるアメリカの読者に、何故シーボルドの本がこれほどまでに受け入れられたのか、それも検討する必要がある。翻訳者である片山奈緒美のあとがきによれば、『ラブリー・ボーン』の最初のシーンがレイプ殺人から始まる為、全米の書店の店員達は、とにかくまずは読んで欲しいと書店で言い続けたと言う。確かにレイプ殺人から始まる物語は事件の痛ましさと凄惨さだけが印象に残る危険があり、このような物語の魅力を他人に伝えるのは大変難しい。しかし「とにかく本を手にとって読んでもらえば、読後、読者の心に静かな温かい感情がわきおこるはず。そんな自信があったに違いない。」と片山は記している。

小説『ラブリー・ボーン』は「わたしはスージー・サーモン。魚と同じ名前よ。1973年12月6日に殺されたとき、まだ14歳だった。」という書き出しから始まる。スージーは、中学校からの雪の降る帰り道、家への近道であるトウモロコシ畑で、近所に住むミスター・ハーヴェイによつ

てレイプされ殺害される。その後に記述されるストーリーは、天国にいるスージーからの視点で描かれる。こうして物語では、主人公であるレイプ殺人の被害者である14歳の少女スージーの視点から、愛情豊かな眼差しで細やかに描かれた家族像が中心に語られていく。

ここで明らかになるのは、物語の始めに、主人公であるスージーは既に死んでいるということである。スージーはつまり、その物語の最初から未来も過去も奪われた存在であり、そのような存在としての少女の目によって、自分の家族や友人を見つめ、そこにある人と人とのつながり、人生、また彼女の死によって一旦崩壊した家族の再生を、辛いテーマにもかかわらず、時折そこに14歳の少女のユーモアを含めながら描いていく事、それがこの物語の特徴となっている。

この天国の描写が面白い。スージーは天国で数日経った後、天国はそこに行った人達がそれぞれ自由に想像出来るものであり、みな自分達なりの天国にいるのだ、ということに気が付く。だからスージーがそこで観ている人達（実はそこは天国の高校なのである）が彼女とそこに一緒にいるのは、たまたまかれらの天国とスージーの天国が一致したまでのことである。そこにはきちり重なっているわけではないが、沢山の共通点が存在しており、それとはまた別の天国を想像する人達は、単にただ別の天国にいるのである。

シーボルドの宗教背景について書かれた資料は手許にはないが、この天国の描写の仕方は大変独創的で興味深い。これはある意味でアメリカ社会の宗教をめぐる多様性の反映と見る事も出来るし、またそこで描かれる天国が、物欲的には何でも入手可能なものとして描かれているのも、作者の小説作品としての娯楽性を狙った部分を差し引いて考えた上でも、やはりある種の世俗性というものが垣間見られる部分かも知れない。いずれにしても、これがシーボルドの独自でオリジナルな天国のイメージからなっているという事、またそれが14歳のスージーの“天国”観として、ある種のリアリティーを持って読者に伝わって来るものとなっているという事は、この作品の魅力の重要な一部である。

確かにこの天国では、想像する事は何でも簡単に手に入れる事が出来る。どんな素晴らしい豪華な家でも、美味しいアイスクリームでも、有名人のような気分になって顔写真付きで新聞に載る事も出来た。しかしスージーが最も望む事、つまり生きて成長する事、大人になる事、そしてミスター・ハーヴェイが死んで彼女が生き返るという様なことは、天国では実現出来ない事であった。しかし、じっくりと観察して、そして心から望むなら、家族や友人等、自分の愛する地上の人達の人生を変えられるかも知れない、とスージーは思うようになっていく。

スージーの死後、彼女の家族に降り懸かった悲劇、そしてそれに続く家族の再生の物語は、このようにして天国にいる彼女の視点によって語られていく事になる。最初の知らせは、警察からの電話によって家族に伝えられた。連絡を受けたスージーの父親は、吐き気を催す程の震えに襲われる。家族に何と伝えれば良いか、スージーの父親は思案に暮れる。スージーの母親はショックを受けたまま、まだはっきりした事は言えないという刑事の言葉にすがり、嘘はイヤだと言うスージーの妹のリンジーは、見つかったのがスージーの肘の一部と知ると、予告通りその場で吐いてしまう。弟のバックリーは小さすぎて、何が自分の姉に起こったのか理解出来ずにいる。

この日を境に、スージーの家族の状況は一変する。隣人のミスター・ハーヴェイが犯人ではないかという確信を胸に、何とかその証明をしようとするスージーの父は、その事によって自らを失い妻との溝を深めていく。苦しみに耐えかねたスージーの母は家を出てしまい、残されたリン

ジーとバックリーの生活には、そこかしこにスージーの死が付きまとっている。そうでなくとも大変な思春期に、かれらは殺された姉と壊れた家族、その二つの重い事実を背負って成長しなくてはならない。

スージーが殺されたという事件を機に、粉々になってしまったスージーの家族が、もう一度一つになろうとする、その再生の過程を天国からじっと見守るスージーの視点は、時に哀しくそして温かい。物語には、劇的な意味での結末は何も用意されていない。そのかわり、シーボルトは登場人物達、またひいては読者達に、家族とは何か、また愛とは何かという問いへの答えとなり得るような、ある癒しの形態を提供する。

しかしながら、そこには押し付けの価値観や決めつけの結論は存在しない。それは、スージーの家族と同様にして、救いようのない想像を絶する経験を生き延び、またその上で何らかの救いを得て来たと思われる、作家としてまた女性としての、シーボルト自身の人柄や生き方が反映されているように思われる。

### 3. 書く事の途絶とスピリチュアリティについて

先に『ラブリー・ボーン』が受け入れられた、アメリカの社会的状況に付いて述べた。ここでは、彼女の本がこのように広く受け入れられたもう一つの理由について記述したい。この時“新人”作家として紹介されたシーボルトであるが、実はこの作品を遡ること3年前に、『ラッキー(Lucky)』<sup>(12)</sup>というノンフィクションを書いている。この本のタイトルが何故このようになったのか、その説明はこの作品の核心の部分と深いかわりがある。何故なら、これはシーボルト自身が大学生の時に受けたレイプの体験と、その苦悩を綴った作品であり、またこの本のタイトル、ラッキー(幸運)は、シーボルト自身の壮絶なレイプ体験とその後の苦悶に関連して付けられた題名であるからだ。

大学生の時にレイプ被害に遭ったシーボルトは、担当の警察官から、あなたは同じようにして被害に遭った上に殺された被害者達に比べれば「ラッキー」であったと言われる。この題名は、それに対する怒りと皮肉、また彼女の強い憤りと共に付けられたものである事は明白である。それと同時に、被害に遭った側であるはずの彼女が、その後更なる二重三重の苦痛を受けていく過程は、この題名が筆者のスピリチュアルな痛みの中から生じたものである事を示していると言える。これはまさに、最初に引用したハーマンが言うような、人間の体験に意味や秩序を与えている信念のシステムを形骸化し、また無惨な迄に引き裂いてしまう状況であり、また被害者の自然的または超自然的秩序への信仰を踏みにじり、被害者を生か死かという二者択一の危機的状況の中に投げ入れるものなのである。

彼女の辛い体験とその衝撃的な内容を綴ったこの本は、実は『ラブリー・ボーン』とは切り離せない関係にあり、『ラッキー』が母体となって『ラブリー・ボーン』が生まれたと同時に、『ラブリー・ボーン』自体が完成しなくては、『ラッキー』が完成しなかったという事情がその背景にはある。「私には、それが染み込んでスージーのストーリーをダメにしてしまうような、私自身を押しえ付けていた私の物語があったように感じました。……私は、スージーの物語を小説にしたかったのです。」と、後にシーボルトはタイム誌のインタビューで答えている。その記事を書いた記者は続けて、『ラブリー・ボーン』は一切の隠された自伝的な痕跡の見えない作品となり、それ

はシーボルドの個人的な、また作家としての勝利である、と書いている。(13)

実はここで一つ、前掲のハーマンの本の中に、シーボルドに関する重要な発見がある。『ラッキー』よりも更に前に、シーボルドは二つの作品をこの世に生み出そうとして、そのどちら共が不成功に終わっているのだが、彼女が格闘していたちょうどその時期に、彼女の名前はこのハーマンの本の中に登場しているのである。そこでハーマンは、如何に外傷的な事件が、被害者の持つ世界の安全性に関する、基礎的な前提を破壊するののかについて記述している。その基礎的前提とは、自己の肯定的かつ積極的価値、また想像された世界の意味ある秩序性を意味するという。その説明の為の引用が、以下のように行われている。

「レイプ被害者のアリス・シバルドはこの安全保障感の喪失をこう証言している。すなわち「レイプされた時、私はヴァージニティを失い、生命を失いかけてました。また、私がこれまで抱えてきた、世界の動き方についての前提、どのようにして私の安全が守られているかという前提を放棄しました」(14)

そのような過程を経た後のシーボルドが、『ラブリー・ボーン』に記述したそのレイプ描写の表現は、ある意味で大変簡潔であり、まただからこそ真に迫るものであった。これは彼女が自らの体験の中から得たもの、またそこを超えて行く過程で勝ち得た彼女の表現である。またこの重いテーマを扱った小説の、その全体に見られる温かい筆致は特筆に値する。これを最も敏感に察知したのは、露悪趣味的、またはセンセーショナルさを狙ってこぞって打ち出される作品にうんざりしていたアメリカの（実際の被害者達を含む）読者達であった。かれらはシーボルドの作家としての一流の娯楽性を読み取ったと共に、そこに存在する彼女の、特に当事者やその家族への配慮の心情と、その気持ちの誠実さを見いだしたのである。

しかしながらシーボルドのこの体験そのものは重く悲惨であり、その埋没してしまった辛い記憶、または隠れてしまった強い感情や情動を、思い起こそうとする事は、非常に厄介なプロセスであったことが推察される。特に犯罪の被害等を受けた側の立場の人達にとっては、それは傷が塞がる前に瘡蓋を剥ぎ取るのにも等しい事であり、心の血を流す事なしにはやり通せない事でもある。(15)そこでは「何故、私が？」という問いに向き合っていく作業が繰り返し要求される。その事を通して、どうしても彼女自身が越えられていなかった感情的体験に再度向き合う機会を持つに至ったのは想像に難くない。そしてそれこそが彼女を『ラブリー・ボーン』執筆に向かわせたのであろう。

こうしてシーボルドは、一度破壊された彼女自身の世界の安定感や秩序に対する信仰を、再び心の中に構築する事に成功したのである。何故ならそれは同時に、ところどころ重なりを見せるものの、根本的には相入れない2種類の語り、つまり事実認識をしっかりとさせ、例えば法廷や警察での証言に耐えうるような証言を行っていくような記憶想起のプロセスと、心の中にあるスピリチュアル・ペインを癒して行く為に自らのナラティブを構築していく作業とを、分ける作業だからである。この過程を経て、初めてシーボルドは、自分のスピリチュアリティを自覚すると共に、独自の世界を持った作家として作品を作り上げていく力を得たのである。

このことを裏付ける最も重要な事実は、シーボルドの『ラブリー・ボーン』執筆の意図は、実体験を自らの小説の中で再度構成し、そこにカタルシスを見いだそうとするようなものとして書かれたものではなかったということである。むしろそこからの脱却の為に『ラブリー・ボーン』

は執筆されたのではないかと考えられる。そして実体験に基づく『ラッキー』はその過程で、より写実的なドキュメンタリーとして完成される事となった。これは彼女のインタビュー内容からも裏づけされるものである。(16)

こうしてシーボルドは2つの本を出版した。『ラッキー』は、彼女が実際に受けたレイプ体験を具体的に伝える本、またはそのような体験を受けた人達をどのように支えて行くのか、それを考える際のガイドとして活用されるようになった。この本によって、具体的に彼女が警察に対してどのように対処したか、またどのようなひどい状況の中で犯人を探し出そうとしたのか、その現実的な葛藤のプロセスを知る事が出来る。そして『ラブリー・ボーン』は、スピリチュアル・ペインを抱えたままの想像を絶する闘いの後に、彼女がそこから癒される経験を経て到達した、作家としての新しい境地を示すものとなった。

このように、内なる信頼感の源泉や究極のものとのつながりが感じられない、または見出せない苦しみの事をスピリチュアル・ペインと考えるならば、その苦しみを維持しながらも、当事者を全人的なケアによって支えようとするのがスピリチュアルケアである。そしてこのような場合のスピリチュアリティとは、ある危機的状況に直面した際、また生きる基盤や拠り所といったものが失われた時に、それを再び取り戻そうとする中で立ち現れるものなのである。そのようなプロセスを経て、人間はまた生きる意味や目的といったものを、自らの中にあらたに見いだすことが出来るのだ。

#### 4. おわりに

ハーマンは、基本的な信頼感是对人関係の中から生まれる事、人生の連続性や自然の秩序性、そして信仰といったものは、基本的な信頼の上にあるという事を記述している。つまり、人間にとっての最初の体験とは、ケアされたという事であり、そのような基本的信頼は、人生が切れ目なく連続したもので、自然には秩序があり、そして超自然的な神の秩序がある、という信念の根本であるという。

ところがそのような秩序が破壊される時、人々は恐怖状況に陥れられる。恐怖状況においては、その基本的信頼の根源への救いを求める叫びが上げられる。それはレイプされた女性でも、戦場で傷付いた兵士にも同様の事であり、かれらはどちらも母<sup>(17)</sup>を求め、また神を求めて泣き叫ぶ、とハーマンは言う。そこに男女の別はない。そして、この叫びに応じる答えがなかった時に、その基本的な信頼感は砕け散るのである。

外傷を受けた人々が強く感じるものは、見捨てられ感、孤独感、また命を支えるケアや庇護というような人間と神とのシステムの外に放り出されたという感覚である。そういった切り離されたという感覚は、親密な家族を始め、地域社会や宗教への帰属感到いたるまでの、様々な関係性への深刻な問題となって現れる。そしてその信頼感が失われた時、外傷を受けた人々は、生者よりも死者の方に所属していると感じるのだという。ここでハーマンが語っている外傷経験は身体的、心理的、社会的な苦しみの次元を超えており、死に直面する人々がこうむらざるを得ない苦しみと同次元の苦しみ、すなわちスピリチュアル・ペインと呼んでよいものである。

ハーマンおよびヤングの両方の訳に携った、精神科医の中井久夫が述べているように、「精神医学が心的外傷を過小評価する傾向には注意しなければならないし、われわれが内的過程と外傷的



過程とを統合して眺める地点にはまだ達していないことも忘れるわけにはゆかない」<sup>(18)</sup>というのが実情であろう。

トワイクロス<sup>(19)</sup>も述べるように、身体的、心理的、社会的な、それぞれ3要素のすべてと密接に関わりながらも、それらに宿っているものとしては見えず、むしろその3つの要素を包含し統合するものとして、そのような過程の中から現れるのがスピリチュアルなものである。このような次元は、平常な生活を支える3つの要素がどれも破壊されたような状況においてこそ、強く立ち現れてくる。身体的、心理的、そして社会的にも壊滅的な被害を受けた人々が、再び統合的な自己を構築し直して行く過程で、そこにスピリチュアリティが関わって来るのは、従って必然的な事なのである。

アリス・シーボルドの2つの作品と、その成立をめぐる彼女自身の回想からは、スピリチュアリティがどのようにして個々の傷付いた人々の内側から立ち現れてくるのかということ語る、静かであつ雄弁な“ことば”が溢れている。当事者としてのシーボルドが、長い時間をかけて自らの経験をとらえ返してきた歩みが、そしてそこから生み出された世界と人々への温かい眼差しが伝わって来る。だからこそ、それに共感し支持する、あれ程多くの読者を得る事が出来たと言えるのではないだろうか。筆者は今後ともそのような見地に立って、当事者の視点を踏まえた宗教性およびスピリチュアリティ研究を続けて行きたいと考える。

## 註

- (1) ジュディス・L・ハーマン (中井久夫訳)『心的外傷と回復』みすず書房、1999年。Judith Lewis Herman, *Trauma and Recovery*, Basic Books (HarperCollins Publishers), 1992. ハーマンによるこの著書は、ハーヴァード大学医学部の精神科で教える彼女の、研究及び臨床実践に基づいたものである。ニューヨーク生まれのハーマンは、1967年にハーヴァード大学医学部を優秀な成績で卒業した。その後の彼女の臨床経験および協力活動は広く、女性精神保健共同体、暴力被害者センター、病院における外傷後生存者の為の精神科部門、等々に及ぶ。また彼女は“難民、戦闘参加帰還兵、犯罪被害者を対象とする臨床家と研究者を結び付ける研究グループ”に関わる、同じハーヴァード大学医学部精神科の男性の同僚達との議論を通じて、その研究と実践を発展させて来た。本書はハーマンの、性的および家庭暴力の被害者を相手に、臨床と研究両面から取り組んだ約20年間の成果の結実である。ハーマンはまた本書の位置付けを(公的世界と私的世界、個人と社会、男性と女性、レイプ後生存者と戦闘参加帰還兵、被殴打女性と政治犯、多数の民族を支配した暴君が生み出した強制収容所の生存者と自己の家庭を支配する暴君が生み出した隠れた小強制収容所の生存者との、それぞれの間の)つながりを取り戻すことに関する本、コミュニケーションに関する本であると述べており(xiv ページ)、そこにはトラウマ問題は男女に関係なく、私達全ての問題であるという、彼女自身のメッセージが込められている。
- (2) アラン・ヤング (中井久夫他共訳)『PTSDの医療人類学』みすず書房、2001年。Allan Young, *The Harmony of Illusion - Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*, Princeton University Press, 1995. アラン・ヤングはペンシルヴァニア大学において人類学で博士号を取得した、医療人類学者である。1938年生まれのはいわゆるベトナム戦争世代であり、大学在学中に陸軍将校に任官されたが、間一髪之差でベトナム赴任の命令が撤回された事により、ベトナムの地を踏む事はなかった。しかしその代わりに課された任務は捕虜問題の検討であった事から、ベトナムにおける米軍捕虜の現状を把握する等の為のその任務の過程で、ヤングは該当期間にベトナムで起こっていた恐ろ

しい出来事の記録を目の当たりにする事となる。この経験が彼をその後のベトナム帰還兵 PTSD 治療についての人類的研究に向かわせた。訳者のひとりである中井久夫はこれについて「彼は戦争がもっとも苛烈だった時期に不意に部下と分かれて内地勤務に転じた。ある意味ではかれは生存者（サヴァイヴァー）であり、生存者としての責務を彼が感じたとしてもふしぎではなからう。」と述べている。

- (3) 「スピリチュアリティ」は多義的な語だが、「宗教」との対比において用いられることが多い。例えば島菌は、religion という言葉ではなく spirituality を好む点が今日の新しい宗教動向であり、現代の先進国において religion は個人を抑圧するものとして嫌われ、むしろ個人に基づいた spirituality という言葉のほうが好まれるとしている。島菌進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年、50ページ。
- (4) 筆者の考える「当事者」をめぐる問題とは、社会のしくみにうまく適応出来ない為に問題があると考えられ、その問題の渦中にあるにもかかわらず、その処遇を自分以外の人々によって決められてしまう、という事である。一般に異なる立場の“当事者”同士は、共通の協力の輪を広げる事が可能であるが、それと同時に、最終的な自己規定や自己決定の部分に関しては、本来その当事者による考え方が最も重要であり優先されるべきである。このような当事者についての定義は、以下の本における上野千鶴子による定義と重なる。当事者の問題についての様々な提言を含むという意味でこの本は画期的である。しかしその一方で、それがもし戦略的なものであっても、執筆の担当箇所を明記しない共著というかたちには、問題があるというのが筆者の考えである。何故なら、中西と上野はそれぞれの違う問題の“当事者”ではあっても、同じ中西・上野という“個人”であるかのように執筆する事には無理があるからだ。筆者が前述した通り、“当事者”同士は協力の輪を広げる可能性を有するが、その“当事者”同士がまるで全く同じであるかのように振る舞う時、そこにある個別の差異は無視され、背景にある多様性が無視される。そのような協力態勢の中には、文化的・社会的な力関係が反映される危険性がある。 “当事者” 同士による協力の輪は、それぞれの多様性を踏まえた上で行われるべきである。このような問題提起も含めることを意図した上で執筆されたものであるならば、この本は確かに戦略的に成功していると言えるであろう。中西正司・上野千鶴子『当事者主権』岩波新書、2003年。
- (5) 前掲書、46ページ。
- (6) ハーマンによれば、歴史は心的外傷を繰り返して来たという。本書の第1章は、ハーマンによるこの説明に費やされている。彼女によれば、19世紀以来、心的外傷のそれぞれの形態は3度、公衆の面前に浮かび上がって来ており、それぞれは当時の政治的な動きに伴って盛んになったという。まず1つめはシャルコーらフロイトらによるヒステリー研究、2つめは第一次大戦やベトナム戦争の時の砲弾ショックと戦闘神経症、そして3つめは性的暴力と家庭内暴力であり、それは近年のフェミニスト運動の流れから生じて来たものである。この争いの中で、中立的な位置を維持するのは不可能な事であり、また加害者に加担する事は優しい事だとハーマンは述べている。何故なら、第三者は残酷な記憶を出来るだけ早く忘れたいし、また加害者はそれを隠す為にはどんな手を使っても世論を味方に付けようとするからである。対して被害者の声は聴かれずまた途絶えがちとなる。ハーマンは、心的外傷の研究者は常にこの傾向性との絶えざる闘いに投げ込まれるとしている。
- (7) このような動向について書かれたものとしては、和書では矢幡洋の著書『危ない精神分析—マインドハッカーたちの詐術』（亜紀書房、2003年）などが挙げられる。
- (8) 前掲書、xxxviページ。
- (9) 前掲書、349ページ。
- (10) アリス・シーボルド（片山奈緒美訳）『ラプリー・ボーン』アーティストハウス、2003年（Alice Sebold, *The Lovely Bones*, Little, Brown and Company, 2002.）。

- (11) 日本においても、このような犯罪の被害者や遺族の心の傷に関する問題意識が高まりつつある。2003年12月18日付けの毎日新聞の記事(“ここ数年の犯罪被害者：事件後もPTSDに 警察庁が「心の傷」調査”)は、そのような動きを示す一例である。警察庁の「犯罪被害者実態調査研究会」(座長・椎橋隆幸中央大教授など専門家6人で構成)が18日、事件で受けた「心の傷」などについて、犯罪被害者と遺族を対象に行った意識調査の結果を公表したことが報告されており、その中には、とりわけ遺族や女性の性犯罪被害者が、時を経ても重いPTSD(心的外傷後ストレス障害)に悩まされている実態が浮かんでいる。
- (12) Alice Sebold, *Lucky, Little, Brown and company*, 1999 (2002).なお『ラッキー (仮題)』は『ラブリー・ボーン』と同じ翻訳者によって日本語訳が刊行予定である。
- (13) Lev Grossman, “Murdered, She Wrote: Alice Sebold’s novel, *The Lovely Bones*, is a tragicomedy told by a slain 14-year-old girl.” *Time magazine*, July 1, 2002.
- (14) A. Sebold, “Speaking of the Unspeakable,” *Psychiatric Times* (January 1990): 34.
- (15) 精神科医であり医療人類学者であるアーサー・クラインマンはその著書『病いの語り』(Kleinman, Arthur. 1988. *The Illness Narratives: Suffering, Healing & the Human Condition*, Basic Books.)の中で、彼が研修医時代に立ち会った、殆ど全身に及ぶ重篤な火傷を負った少女の治療現場についての思い出を綴っている。そこでは瘡蓋を剥ぐ、という治療が行われていた。そのような行為は、感染に十分注意した手当てやケアを前提にした(ここが重要である)デブリービングという治療法としては、実は傷口をより早くより綺麗に治す有益な方法でもあると言う。しかし患者にとっては大変な苦痛が伴うのも事実で、実際若き日のクラインマンは、泣き叫ぶ患者を目の前に、その治療現場から逃げ出したくなったと言う。私自身、見習いの病院チャプレン、またカウンセラーとして行った病院のフィールドワークの際、ケアの現場で同じような状況に何度も遭遇し、その度にクラインマンのこの話を思い出したものである。しかしクラインマンはそこでの、その患者である小さな少女との交流の中から、苦しみの最中にある人の側に寄り添い語りかけていく事の重要性を見だしていくのである。これは本稿における「心の傷」体験と類比起来る事柄である。勿論、このプロセスなくしてただ瘡蓋を剥がすような行為は問題以前の話である。
- (16) 2002年に再版された『ラッキー』の最後には、シーボルトとアメリカ・ナショナル・パブリックラジオ(NPR)のテリー・グロスとの対談が載せられており、この本を用いた、(レイプや犯罪被害等について話し合う)リーディング・グループ・ディスカッションの為のガイドとなっている。
- (17) ハーマンはここでこのように述べているが、一般的には理解出来るものの、筆者はこれを母なるものとしてだけでなく、またそれに加えて父なるものについても記すべきではないかと考える。いずれにしても、自らを守ってくれる根源的な存在の象徴、という理解が適切のように思われ、それについてのイメージは、母なるもののイメージが一般的には優勢、ということであろうか。
- (18) ハーマン前掲書、414ページ。
- (19) ロバート・トワイクロス「第2回ホスピス国際ワークショップ：末期癌患者の疼痛緩和および症状のコントロール」財団法人ライフプランニングセンター・ピースハウスホスピス教育研究所編『1994年度活動・研究業績集：5』。

**Spirituality and Recovery from Trauma:**  
**An Analysis of Alice Sebold's Construction of *The Lovely Bones***

Yumi FURUSAWA

In this paper I discuss the experience of emergent spirituality in individuals who have suffered traumatic experiences that resulted in the destruction of their dignity as human beings. This includes such people as victims of rape or violent attack, soldiers returning from battlefields and concentration camp survivors. I first demonstrate how researchers such as Judith L. Herman approach issues surrounding PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder). Secondly, I examine the creation process of *The Lovely Bones*, written by Alice Sebold, a rape survivor.

In modern societies, traumatic events at times inspire spirituality rather than "religion." There is a type of spirituality that we can only understand from spiritual pains caused by traumatic experiences and from the process of recovery from such events. Through analyzing the experiences Sebold suffered and the process of the production of her novel, I examine how survivors of serious psychological and physical damage attempt to search for new ways to live, and how spirituality emerges in the lives of these individuals.